

「旧陸軍遺構における施設群建設の特徴と変遷に関する研究」

建設工学専攻(修士課程) 504104 武宮 恭子(たけみや きょうこ)
建築史研究 指導教員 伊藤 洋子教授

1. 研究の背景・目的

1-1 研究の背景・目的

日本は江戸から明治時代へ移る際に全ての物事において大きな変貌を遂げる。それは明治維新で新政府が立ち上げられ、多くの欧米文化を取り入れようとする動きに始まる。その中でも建築分野では海外から技術顧問団を招聘し多くの洋風建築に関する技術が導入されることになった。当時の最高技術の粋が集結された代表的建築には旧軍関係建造物が挙げられよう。

しかし、その文献や公文書は敗戦直後、軍事関係の公文書を大量焼却したことにより、ほとんど残っていない。また、建築史研究者によっても研究がされ始めた段階であり、実態は解明されていない。実際は自衛隊駐屯地や陸軍駐屯地跡を中心として膨大な量の陸軍施設が残されており、文化財として指定されているものも少なくない。しかし、近年にまで総合的な評価は為されてなく、あまりその存在は世に知られないままである。本研究では旧陸軍遺構の平面構成や仕様を探ることにより、その特徴を明確にすることを目的とする。

1-2 研究対象・枠組み

本研究では、学部4年次から実測調査を行ってきた「旧陸軍遺構調査」における全国14都市、14棟を対象とし、1.師団司令部 2.連隊本部 3.将校集会所 4.その他の4つに分類する。区分ごとに痕跡調査や、聞き取り調査、文献をもとに復原を行うとともに、防衛研究所所蔵の「陸軍省大日記」などの古文書をもとに当時の営繕組織の動向や旧陸軍施設群の建設についての記述を出来る限り洗い出し、建設の過程を追うこととする。また、陸軍省大日記・大日記乙輯に現存する図面類と実測調査データを含め、陸軍建造物が時代によってどのような変化を遂げたか、またその陸軍施設群の特徴を明確にしたい。

2. 既往研究の整理と本研究でのアプローチ

2-1 既往研究について

現在、建築学会などで発表されている旧陸軍遺構に関する研究は増えてきている。そのなかでも中森勉氏による「陸軍営繕組織」に関する研究では明治初期、中期、後期の組織体制について全般的に分析されている。また、陸軍省発行の「建築要領草案」についての文献では各陸軍施設群の標準的な平面形と標準仕様書なるものがまとめられており、当時の施設建設の特徴を読み取ることが出来る。

その他では各一都市における建築(単体)の研究はなされているが、全国的にまたがる調査発表はあまり行われていないことが実情である。

2-2 調査方法と利用資料について

本研究では実測調査を行ったデータを最重要資料とし、現広報資料館を痕跡調査などから復原し、当時の平面構成を明確にする。それを1.師団司令部 2.連隊本部 3.将校集会所 4.その他に分類する。各区分ごとにその特徴を考察し、陸軍施設建設計画の建設年代による特徴とその変遷を追う。

2-3 旧陸軍営繕組織について

陸軍省の構成は、明治23年の改革によって営繕業務を統括する部局が、全面的に会計局(後の経理局)に移管されたことにより、一時工兵方面ともに二元化していた営繕業務が一化されたことが始まりである。結成初期は他国から技師、技手などを招聘していたが、その職制が整ったのは明治29年以降である。その技術者人員は臨時建築部が編成された時期に増加し、その後増減が多々みられる。後の大きな変貌は、第二臨時建築部が設置された明治40年以降で、高等教育を修めたものが増加し、こうした技術者の充実によって組織も安定していったといえる。

3. 実測調査建造物について

3-1 師団司令部

i) 旧第11師団司令部(香川) ii) 旧第9師団司令部(金沢)
香川師団は明治31年、金沢師団は明治29年に建設されている。両師団は日露戦争後の師団増設に伴い設置された。香川の場合、大正11年(1922)に陸軍大演習がこの地であり、摂政宮殿下の来臨を迎えるため正面に車寄せが設けられたが、それ以外は建築当初の姿をおおむね保ってきた。また、金沢は所管移行に伴い大幅に縮小されたが、復原を行うとコの字型プランの正面に玄関があり、階段室に繋がる。中廊下の両側に会議室や事務室が並び、師団長は2階の奥まったところに部屋をもつ。

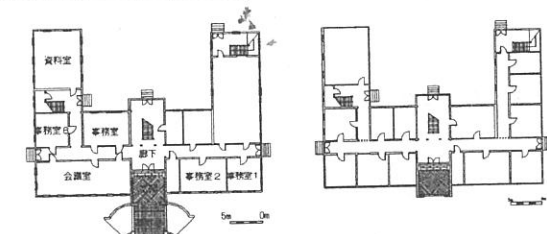


図1 香川師団司令部現状

図2 香川師団司令部復原

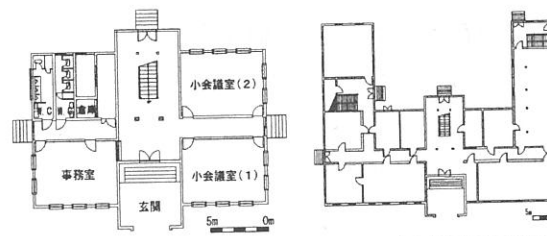


図3 金沢師団司令部現状

図4 金沢師団司令部復原

3-2 連隊本部

i) 大村連隊本部 ii) 青森連隊本部 iii) 久留米連隊本部
本調査では3棟の連隊本部について調査を行った。建設は青森が最も早く明治11年(1878)でコーニスや胴蛇腹が特徴的である。次いで久留米が明治30年(1897)、大村が明治32年(1897)である。後者二棟は日清戦争後の軍備拡張時に建設されたものであり、建設期間も短期間であること、また概観に装飾性がみられないことから、青森と比較すると雑であるといえる。その構成は木造二階建、中廊下型の平面で、二階には連隊長室など主要な部屋が配され、その連隊長室は中廊下の中央軸線に位置し、全体を見渡せる構成になっている。二階中央には比較的大きな居室が数部屋置かれ高等軍人会議室として使用されたのではないかと推測される。

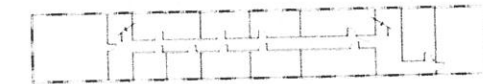


図5 青森連隊本部 二階復原平面図

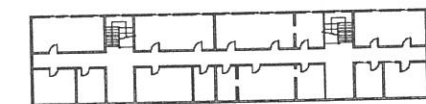


図6 久留米連隊本部 二階復原平面図

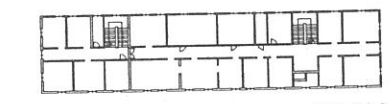


図7 大村連隊本部 二階復原平面図

3-2 将校集会所

i) 野砲兵第九聯隊将校会議所(金沢駐屯地) 明治31年
ii) 野砲兵第十九聯隊将校会議所(高田駐屯地) 明治39年
iii) 歩兵第六十四聯隊将校会議所(都府駐屯地) 明治43年
iv) 歩兵第二十聯隊将校集会所(福知山駐屯地) 明治31年
v) 陸軍明野飛行学校将校集会所(明野) 大正11年
将校会議所は将校の社交場やクラブ的な役割を果たしていた。明野航空学校を除く将校集会所はいずれも明治30年代から40年代に建設されており、多くの共通要素を見ることができる。平面は桁行方向18-20間程度、梁間は5間程度で、そのほぼ中心に出入り口を配している。出入り口を中心に片側に大きな集会所、反対側の中廊下で小く間仕切られている会議室などを設けている。集会所奥には専用の出入り口を持った貴賓スペースを設けていることが最大の特徴といえるだろう。このような類似点の他にヴェランダの有無、規模の変更など異なった点もみられ、建設年代によりその形態を変更している。

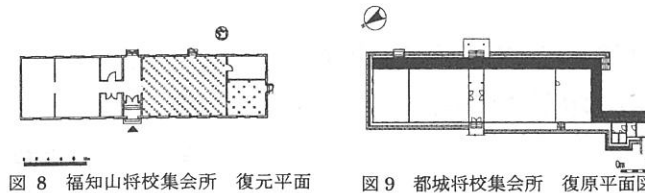


図8 福知山将校集会所 復元平面図

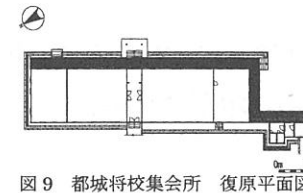


図9 都城将校集会所 復元平面図

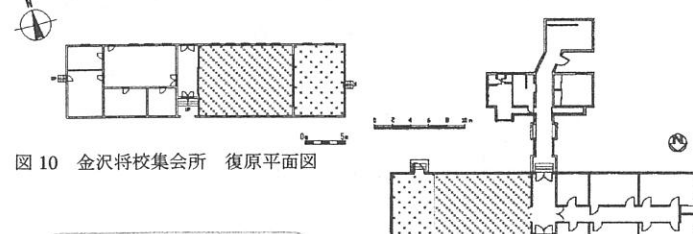


図10 金沢将校集会所 復元平面図



図11 高田将校集会所 復元平面図

3-3 その他

i) 山口尚武館 ii) 信太山皇族舎 iii) 習志野馬見所 iv) 朝霞陸軍士官学校皇族舎

ここで取り上げる建造物は陸軍施設群の中でも特殊であり、全ての駐屯地に存在するものではない。建設経緯もそれぞれで、山口駐屯地の場合、建設費は陸軍省ではなく長州藩の藩主を務めた毛利家が資金を寄贈した。これは現在残されている棟札から確認されている。様式は、社寺風の詳細を用いたりして和風の要素を強くしているが、木造漆喰の外壁や開口部は明らかに洋館のプロポーションを採用している。しかし、前項で挙げた標準設計ではなく、寄贈者の意思を生かすべく設計されたものである。他の3棟にはすべて皇族が関係している。皇族が軍に入ることとは特別なことではなく多々みられる。しかしその扱いは特別に優遇され、専用の住居などが建設されている。比較対象となる建造物が存在しないため、皇族仕様を探ることは難しいといえる。

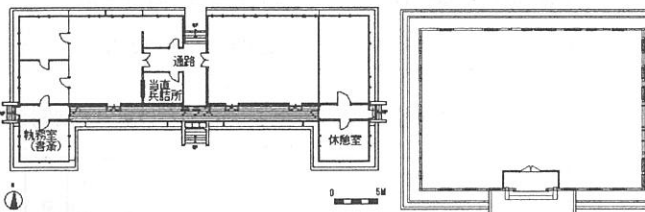


図12 信太山皇族舎復原平面図

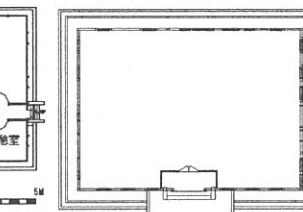


図13 山口尚武館復原平面図

4. 陸軍省による建築に関する規定

4-1 事務規定

現在残存する建造物を調査し、類似する建造物が多く見られる。それを裏付ける旧軍施設群には標準化が定められた法案が確認されている。まず明治24年(1891)年に「事務規程」が制定され、すべての営繕が陸軍大臣の認可の基に実施されるよう定められている。

その後、幾度かの部分改正が成され、明治44年(1911年)の改正において大きな骨格を形成する。特に第十条に「工事中主要ナルモノハ陸軍省経理局長ヲシテ其ノ設計ヲ掌ラシム此ノ場合ニ在リテハ陸軍大臣ヨリ設計圖書若ハ設計要領書ヲ当該管轄者ニ下付ス」この条文から明治末期に至って陸軍大臣からの「設計圖書」または「設計要領書」が下付けられることにより、建設すべき建造物の内容が明確に示されるようになったことを窺わせている。

4-2 建築要領草案

明治43年に陸軍省から『建築要領草案』が発行され、その章構成は4章からなる。第3章で「各建物及各種構築物構造要領」として師団、旅団、連隊、兵舎など6項目に分けて師団施設群の標準的な平面型などが記載されている。

次項では草案発行後に建設され、密日日記に図面として現存しているものと実測調査データを含めて、各陸軍施設の特徴を見出すこととする。



図14 営繕事務規定

5. 各施設群の特徴

5-1 師団司令部

陸軍省大日記・大日記乙輯において師団司令部に関する記述は少なく、図面類は確認することが出来なかった。一般図書や先行研究に何棟か取り上げられている。本研究で取り上げた、香川、金沢師団司令部は日清戦争後の増設師団である。その外形は桁行19間×梁間13.5間、桁行19間×梁間14間の規模で、両者ともに木造二階建、コの字型平面で左右対称である。また、窓の配置やベディメントなどの装飾性を共通項が多く見られる。

次いで日露戦争後の増設師団で現存する豊橋の第15師団司令部に注目する。木造二階建、コの字型平面で左右対称と類似しているが、その規模は桁行31間×梁間7間で前時代より桁行が長く、全体的に大きくなっている。外観も装飾性が減り質素な造りになっている。明治40年代に入ると師団司令部の中にも煉瓦造の建物が見られるがそれは大都市の京都、東京であり、他地域は豊橋同様木造であった。しかし、内部の中廊下型、開口部の開閉方向、階段室の位置など平面構成の共通点もあることから、前時代を引き継ぐ設計となっている。

5-2 連隊本部

最も建設年代の早い青森の規模は桁行27間×梁間4間で木造二階建である。ここで現存してはいないが、仙台の第4連隊本部を挙げる。仙台は青森と同時期に連隊設置が決まった地域であり、その建設年代もほぼ同一である。外形は木造二階建だが、規模は桁行11間×梁間6間と大きく違っている。

次いで建設が行われたのが久留米が明治30年(1897)で桁行27間×梁間6間、大村が明治32年(1897)で桁行27間×梁間6間である。両者共に内部空間は片廊下型、中廊下型ともにあるがどちらも桁行方向に廊下が伸び、営庭に並ぶように部屋を配している。また、一階左右に大きな事務室を設けていることが多く見られる。後者は装飾性は全く無く質素堅実であり、その形態は長方形を保ち、ある程度の自由度が許されていたことが伺える。一方、青森のコーニスや胴蛇腹が付されており、異例であるが、建設年代に関連する可能性がある。

5-3 将校集会所

陸軍省大日記・大日記乙輯では将校集会所に関する記述が多く見られ、配置図や平面図なども少数ではあるが現存している。本研究で調査を行った将校集会所は明治30年代から40年代に建設されており、30年代の建造物は桁行方向18-20間程度、梁間は5間程度で、そのほぼ中心に出入り口を配している。出入り口を中心に片側に大きな集会所、反対側の中廊下で小く間仕切られている会議室などを設けている。40年代の建造物は都城の他、豊橋、名古屋の遺構も現存しており、規模は前述と変わらないが南面にヴェランダが付されるようになっている。しかし、陸軍省大日記・大日記乙輯において騎兵第5連隊将校集会所に関する図面があり、桁行9間×梁間5間で、下屋廊下を持ちL字型の平面をしたものである。

将校集会所はその建設に大きな規則はほぼ無く、各師団連隊ごとに建設が行われ、設計の自由度が高かったといえる。

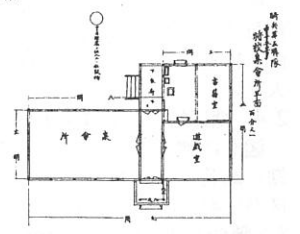


図15 騎兵第5連隊将校集会所

6. 結びに

旧陸軍施設群の建設で大きな変換期を向えるのは、明治30年代、40年代の間である。明治30年代は日清戦争に勝利し、軍は勝利金を獲得し、建設資金も充実していた。その為、建物は統一された機能、形状の他に装飾性を持つことが特徴といえる。明治40年代は、日露戦争に勝利したが、軍事資金不足の時代であり、その建物は30年代を踏襲しながらも機能重視になりその規模を大きく変え、装飾性が減少していく。「質素堅実」という言葉はこの時代を象徴するものではないだろう。

また、旧陸軍遺構は、師団司令部、連隊本部のように位が下がり、また、その使用用途の重要性により建造物の自由度が変化している。やはり師団司令部は4果を統率する大部隊であることから、建物は象徴的で、強固な外観であり当時の最高技術、材料を用い、その配置も営門から直線状で、人の緊張感をかきたてる計画となっている。

参考文献

- 山口歩兵第四十二連隊史編纂委員会編「山口歩兵第四十二連隊史」1998
- 藤原彰「日本軍事史」日本評論社 1987
- 金現代史編纂会編「陸軍師団総覧」新人物往来社 2000
- 中森勉「明治後期における陸軍省『建築要領草案』にみる標準化について」日本建築学会大会学術論文梗概集 1992
- アジア歴史資料センター所蔵「陸軍省大日記」